

令和5年度博物館実習生製作企画展示

令和5年8月11日(金)

【1 班】

1 タイトル 「シティ・バードが生きる術」

2 趣旨

野鳥の観察をするには、山や森、水辺のような自然の豊かな環境に行かなければならないというイメージがあるかもしれない。しかし実は近年、ハシブトガラスやハクセキレイ、スズメのような野鳥が市街地に進出し、街の中でも野鳥を観察できるようになっている。野鳥は種子や昆虫、動物などの自然の中に存在する生物を餌とし、枯れ枝のような自然物を巣材として利用してきたが、市街地の野鳥たちは人の出したゴミや人工物を餌や巣材として利用するようになった。

自然環境の中では、野鳥を観察するのに適した季節や時間帯、距離が制限される。樹木の葉が落ちる冬は野鳥の観察に向いている。時間帯としては、早朝や夕方が適している。野鳥は人を警戒するため、近づいて観察することは難しい。しかし、市街地では自然環境と異なり、季節や時間帯、距離の制限をあまり受けずに、その場所に生息する野鳥を観察することができる。

本展では、季節や時間を選ばず観察でき、人との距離感が近い野鳥のハシブトガラス、ハクセキレイ、スズメをとりあげる。紹介する3種の野鳥が市街地へ進出する前と後の生態を比較しながら、市街地に適応した野鳥の生態の変化について展示を行う。

市街地の野鳥の生態の変化を知ってもらうことで、自分の身の回りにいる鳥たちに目を向けるきっかけにし、都市に生きる生き物への興味を深めることを目的とする。

【2 班】

1 タイトル 「ジャパン・ブルーを作った藍」

2 趣旨

青色を作る原料には、鉱石や藍があるが、世界的には鉱石が使われることが多い。その中で、日本では青色の原料となる鉱石に乏しかったことから、藍を青色の原料としていた。藍はインド、アジア、中南米などさまざまな地域で生えているが、日本では、野生の藍は見られず、徳島県で主に育てられている。

藍を原料としたものは、江戸時代以前は上流階級の人のみが持っていたといわれている。しかし、江戸時代に木綿の国内生産が軌道に乗り、全国に流通したことで、庶民が着ていた服の素材が麻から木綿に変わり、富裕な町人階級から庶民に木綿が普及していった。それをきっかけに、庶民にも藍染めが使われるようになった。

庶民にも普及したことで、上流階級しか持てなかった藍染めは身近なものとなり、それと同時に青色も庶民にとっては身近な色となっていった。藍染めの青色は、「ジャパン・ブルー」という日本を代表する青色として広く認識されるようになった。また、全国的に使われていく中で、藍染めには抗菌・防虫効果があると考えられてきた。

タデアイは、ナデシコ目タデ科の植物で、約70cmほどに成長する。藍は、インジカンというインジゴのもとになる成分を持っているので、藍色に染めることができる。マメ科のインド藍、キツネノマゴ科の琉球藍、アブラナ科のウォードが他にインジゴを持っている。日本だけでなく、世界でも藍染めが行われている。

インジカンは乾燥させたり、細かく傷をつけたりすることでインジゴという藍色の成分になる。インジゴは、空気に触れることで緑色から藍色に変わる。藍染めは、この酸化を利用して藍色に染めている。

江戸時代では身近な存在だった藍だが、現代では日常生活から遠ざかったものとなっている。ここから、日本で藍がどのように親しまれてきたかを視覚、嗅覚、触覚を用いて展示することにより、伝

統をより身近に感じてもらうとともに、自然からいただいた色を体感してもらうことを目的とする。

【3 班】

1 タイトル 「ぎょぎょっ！ 魚の口をのぞいてみたら」

2 趣旨

私たちが普段魚を食べるとき、食材として目にする魚は切り身などの体の一部分であることが多い。特に、食べる部分では無い「口元」を観察する機会は少ないと思われる。そのため本展示では魚の口元に注目して魚の生態を学び、魚の口の開く向きや歯の形の違いが魚の食性とどのように関わっているのかを展示することで、魚を目にしたときより興味を持ってもらうことを目的とする。

博物館実習の様子

